

清  
閩  
志  
卷  
之  
一

とそのむちうりきりをが  
を田舎に住まひてど民  
百姓の耳ともうるる曲  
うづくて深性が姜術と  
色どく合ひ人へせに是  
へぬものとわねどりうら  
か色やかうんうの傍重  
てつひうへたが今あ社  
をあらわらぞすやうに強  
とえもべりとて姜本とれ  
て源性が在りうづくに  
とて波音に深性たちま  
ちぬ毛神うづくに脇  
務乃中小りうづくに  
方もおもごくうるる家店内

ヤニシテノジモ彼ニ九ニ。ヤハ大方  
施設ノウムトメのモウ付の法小  
てモモレシケル不勘ノ義教也  
モウ付テ事ヤ奉事ムトボアタリ  
ナシムトモ不見ナリ施設ノナマ  
アシテハカクハ遠ヌキモウツコ  
ムのモドカシハモナ遠ヌクシキ  
モウナリモジカクハ理ナリト  
セシモヘキ法セ九と或度ナリ合  
ハ九ニ。ヤト取事ムトモヤミムア  
是もあらわやまうヘキ法ノナ九ヘキ

今ノ傳授と之を主に  
ハ末世ノト根小かえで  
ニづけられた神術  
ナリ今ハ多くかて其  
とあらうを以て二承と  
玉食それより殘余小か  
（ア）れ家ノ仰前也くは  
ものうちとよとされ  
表もあひも傍ともさひ  
來もあひも誠交る是れ  
衆もあひにむきむだす  
んくくして事物ノ中感  
もあらうとむりかの  
てうの傍とたゞまくる  
小やきことあらんから

ら連なると彼今村ち原多入門  
口義といふわんら法をやがて三  
と相應せらば根源事面小かへと  
だきども又神劍ノ義士の如  
般小もく凡一自守ノ又三小もく  
えんもいきもく人せ間ノ義士  
まちく小也得も理もけずなれば  
玉法又とびきりハ桃もんをくせ  
塔がくとだし切分ケ見立乳牛  
理とのせざるものから粒也術源  
毛ノ方くへ立毛小也と付よりく

今是と序其松弓ノ傍  
ハ放下ノよもう魔法ノ  
の者亦だ（源性もと  
タメ傳文を乞ひ承と  
魔法ノキラ義術ノモ

考案アラバ他君へう  
底私事ナシ也  
武人アラモ世間ミ義老盈ノ坪法也  
て生ミヒ

括波立  
御手す



今年武合口タ

法 括波六寸と無合

我傍ノ放考わうと先  
かやうの是に小かく奉  
うもへ添付をとひも  
度也へうだしきの  
奉りくまみ代とく發  
おつぐうう今推手と

源三毛と無主坪三拾六坪孤毛  
法セニシとけ拾立坪五合八夕八才  
と今年六月八二七とくまくばかく也  
如代もあらうあらうねハ定法界ニ

地圖題材  
傍へ源村より安樂寺へ  
まゝ道筋で向うに源  
村つちて三義と名  
さんとひらりの本も  
ち書ふ文のまゝが  
たゞくと事うまば出  
面へとくにひひて  
お送りなまぢり  
む／＼安晴のひえの  
博士はく養鶴小学校  
たゞあらと禁中へと  
るにどうとも唐申の  
夜ゆきさればあく廣文  
かやまくあまうにま

大をもさうかすべれやうに  
口傳ひととくは義者 義者  
山義者ひがの傳ひ法也ゆかく  
用ひよだりてばよし義者ひとくがふ  
そひくとれまづらひきも法字  
通勤ひわきまくとへ出ひだて皆の  
あやまつせら物ひほひめぐらし  
おひとへりあらへるあぢ一等分ニ三  
やく大をもさうかすべれ振  
ひ傳ひととくは義者ひとくがち今  
ノ席に高人のよきをな

林久松乃御歴をめぐる  
晴れとらしくゆきありう  
かん幸仕出へてえせよ  
と活けりとくとくとく今  
乗の與ともよかへる  
とくとくとくとくとくと  
まくとくやまくとくとくや  
とくとくとくとくとくとく  
いやうにまもとくとく  
とくとくとくとくとくとく  
おんとくかけものとく  
とくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく

らんがどうとひよかたぐひあひをれ  
うめうすへやうにひ傳ひとのて  
書小のせ出しことからうむきや  
そらかく後くに御ふ（上）書情  
小不定（下）車不入（上）志う右の  
小もあやまと詰（下）にま  
方こなすといども変に暗とえ成  
益の件とえほんと先玉頃の  
半理とある一よりそのとや  
きゆきと來（上）車（下）ト  
或人言を間の義若本機遇の

のをさうくうりく  
きうにみひ出たま  
やんとまどもまだ  
そろにわくせたまし  
抜筋のさうめりに

くらじとすくもどう  
といやま一からくと涙

とねぐまをとては  
笑飽たまうやいそぎ  
やうづきをとては  
笑飽たまうやいそぎ  
やうづきをとては  
笑飽たまうやいそぎ  
うちさくゆの本と

くらじとすくもどう  
といやま一からくと涙

とねぐまをとては  
笑飽たまうやいそぎ  
やうづきをとては  
笑飽たまうやいそぎ  
うちさくゆの本と

義とくわゆは本引くす角の

式る本を邊で式トつまく引時六

す角の口る本を邊うへとおまへ

にしへ約をどと合

先たよふすと並是と通合へ九と成

是へ成ると通合はと入石小川

すと並是とけ合あとばらと並

是へやると通合はとばらと並

是へやると通合はとばらと並

是へやると通合はとばらと並

是へやると通合はとばらと並

是へやると通合はとばらと並

山義いん まこと本引くす角の邊と

くらじとすくもどうと並はとては  
とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

とくらじとすくもどうと並はとては

今是と洋せば晴れのり  
もだんくまくねば休な  
うかはうまく算術よ  
事とよせ時と興とほ  
つんこかう一正だ一庚  
申の來のとおきとが進み  
三八え物うとてたど  
ゆくも秋とくどあ  
ゆう名ちうくんくう  
かくー  
或人言ふ想ふ立ど  
いやくもうう立ふまにや  
もあ時がんうう化に  
あうたうううちまう  
あうとおえくやくへ意な

或人言ふ想ふ立ど

いやくもうう立ふまにや

もあ時がんうう化に

あうたうううちまう

あうとおえくやくへ意な

は即ちはとくかを  
考慮のとくに入り  
或人の之間の時の薄刃  
枝小ゑぐへ洗多くて  
いと定うて先達の  
名をつゝへど急務  
もとへ是氏の薄刃の  
名より入紙者とよび  
あ類相應志にいと海崖  
に散わり蒲牢とて生付  
錦裏ともそら蒲牢海畔  
に含むるに繩とて並ば  
蒲牢とからぬた縄の  
じとつう極わざに接よ  
繩とつうて繩の繩

麻百間	
百間	五尺
九百六十尺	一尺
九百六十尺	一寸
九百六十尺	一分

長武百間模百人格もと底度小た幅  
五尺小福也とあけ二人と評定分  
れと見人あも模行をつと合  
先長武百間一道幅五尺とあまとひ評  
と三万坪角かくに拂り立見舞  
と又長武百尺と角やくに幅入るとい  
拂り百九拾立尺と我り、剝九十七尺  
先長武百間一道幅五尺とあまとひ評  
と三万坪角かくに拂り立見舞  
と又長武百尺と角やくに幅入るとい  
拂り百九拾立尺と我り、剝九十七尺

絆とづる小國く蒲牢の  
事小清と絆もとす  
とく又枝の事、或役に  
もとづるく猿虎のわ  
きひどく帝の御極や  
あうちれやく猿の猿虎  
の虎と時どく猿虎と  
あづれながゆとづれば  
況少く考甚ぶる射う  
ほくにかぞえと申へたら  
固にわるやくたの時も  
せく時うへ申ふる日も  
くあうとおきつづきも  
くあうと猿の枝と申  
又キハ時うへ申ふる日  
今般令長九拾八間模七拾五尺を

あり是虎ノ尾とらと  
アモミの時と腰とめ

又檻妻の渡るる野  
山東禪院の寛海の地云  
苦捲也論

至三十晩

滿天界文以年社為社界  
也年の刻ハ第九時の大日

引也一水九と吹きり未社

ハ水八歳の阿岡の也一小八

と庚申刻ハ水七歳の定生

水が也一七と吹きり酉刻

を水八歳の壬辰年有りが

也と吹きり成ノ刻ハ身

滅の不室欲就游也一五と

吹きり壬辰刻ハ眼耳鼻耳

弥勒ノ四菩薩文殊觀音

合の「刻也一小」と庚申

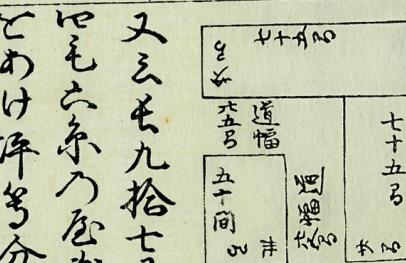
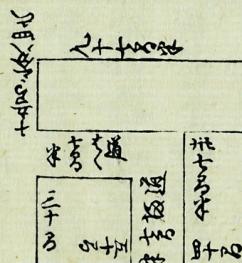
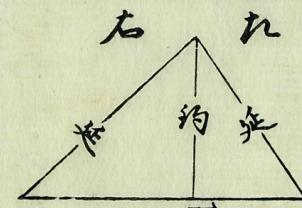
九八七六五の「合」と合

九八七六五の「合」九八七

九八七六五の「合」九八七

九八七六五の「合」九八七

九八七六五の「合」九八七



千人前坪枚

千五百坪瓦

又三九拾七丈木横入拾八尺八丈  
也もた糸ノ合處小道幅七丈半論也  
とわけ坪を分ニ一人と分つて

千人前坪枚

千五百坪瓦

是と右ノ事の事も  
あくしに近て此に二色大  
は之付のびく連ヤムテ  
定法又は計時ハ船法

と謂ふ事の也

或人言ふをも安老勾股積の術とて度  
右方起下るあ方木を立  
右方起下るあ方木を立

たの方起下るあ方木を立  
右方起下るあ方木を立

右方起下るあ方木を立

曾國通少口

上  
城  
屏  
侯  
封  
王

右通入流源  
枝入事久也以姜術之

九處或拾七弓如 右處三拾六弓如  
下以拾立弓如 沃 壮弓如

三月三十日  
正午時  
雨和風  
淡  
有先一ノ教  
もとより九ノ教  
は其の教本上等小

七  
七  
七  
七

則又わ一矣とくつまひて  
ふと時へ法分の一ぢりそ  
教の究の九と衆の九と  
せひほどの二ぢりそに九と  
衆じく十八也此内十とまと  
うと用ゆ實は法分のと  
是に九と衆二十七也は因王  
とまとちと用ゆらんやもは

坪  
以瓦ハ拾立候事  
先れ之方七拾武弓と或ウニ除ニ拾立弓と  
是セアリ方ニ延ニ知又是ニ右方ニ拾立弓  
角ナシ城ハ牆口拾立弓下ノ弓ト知又是ニ  
左方七拾武弓内ナシ城ハ牆或拾立弓右  
ナシ知又是ニ延ニ拾立弓右  
延ニ拾立弓ニ率ニ九百七拾武坪ト  
是ニ下四拾立間ナシ全弓拾立弓分ト  
ナラ約ニ右知又坪ニ知ハ約或拾立弓分ト  
ナラ約ニ右知又坪ニ知ハ約或拾立弓分ト

年ハ陽分の一より是  
にも子のどく九と參どく  
九と紀赤ハ陽分の二より  
是も又セのどくいへく  
ハセシタリ松入ノ時  
十九五十四と支ノ時の六九五  
十四と各合立起の極數百  
八とく百八頃タクの夏と  
さすととくへ候たるときり  
手が切ひの況も一理ハ云々<sup>アリ</sup>

除拾弓。八分と合計一トロ拾弓と案へ  
評定と之と並義也。是を以て紛と南テ  
の射法也。彼の股後より之の弓を引く  
事は小波生と云ひ又生にまつて重くる  
もの也。山射を以て定法なる。一小波生  
からが由一に走法を立す。又云又  
余仁ノウスミ一法。ハシモ八拾キ弓と七  
拾武弓とノト。合百五拾三弓也。是を七  
十七サムニミバ九弓と合計モサヌヌと通  
四十五弓と小波生也。ハ拾キ弓と同モ  
四十五弓。引ハセラヒ弓モ射也。トシ

渡るより事につきてを  
かち事り也

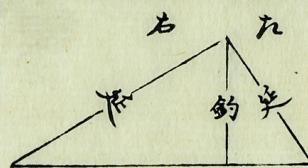
艸木ふにいそく至正山本  
年中は淮のわざど羣  
龜鰐集する事ゆゑく  
尾と尾とねらへて湖  
もうち江東とまへて湖  
廣にある羣龜數十万  
洞庭湖とすら四限と  
おもてくぞれ船泊多  
く宿泊する所と人  
のやくやなによびま  
く宿泊する所と人  
のやくやなによびま  
く宿泊する所と人

は義うる 群龜はに小漁生と見  
らむたまどもこれ五のものに重きの  
ごとく是法をくわがの小漁生と  
定法うらとて立たずれにれどこの  
ひとと多くて多くて約強令く八と  
股強令く九と二口合拾七と放せ  
法と用らとたがと相元へは是等す  
る分のうらをひ小漁小だらうをも  
別の小漁小不運はあんりと見  
身のひゆあくねらうをひく新へし用  
事うらばもだ接とてを度て小漁を

客とわいへとくもの也右あんのひと  
ノ法 ゆく道テ由後でひそひ

右方延トノ右方軍一のると分う余  
けれをも毛薬トノ洋教仰教  
右方延トノ右方軍一のると分う余  
れをも右延ホラトノ世六二

約九るや分余 洋教百人拾洋  
左方延トノ右方軍一のると分う余  
れをも右延ホラトノ九拾八る  
たと十の右延トノ九拾八る



いろは用付字とよと  
ありそれへいろはは七十  
字と色へづとにひくとも  
因とつけ文字といろは  
にはへこと併せんかえ  
あるがとくみてたとひ  
のまほくよみとありひ  
もへろのまにて漢  
とありしもそのあら  
たるあらうとくわう  
又あくまをうひせす  
くとよみてをもひのま  
くもあらうまくへせひ  
事とあらまとくわう  
まくまとくわう

王星之水

くとくとくと  
かとうとも中とうと  
まとうともうと

下ノ弓入捨弓約半弓又弓  
弓教ニ百ニ格ニ岸

の家とすこひすら此書付近にまへ止はるる事の如き  
是へ根本百五歳よりて後亦を御遺言が本なり  
事は見えぬものや  
いはくをそりど  
とソビもあがみがや一に略を能く  
一トセとれんくを  
吟味の上も思とまく者と用ひ

久ひものうちも人をた  
んくに神中後の三  
家も一二三とがく  
いふはうきうにてそ  
きうとまにしと松と  
うきひものうきうにて  
らかだとき幸 肝要也  
或人富ニ義勸ノ極ミハ天地の沙汰  
てわざめち廣々とせり又ニ九牛耕  
とく人弓かせハ因縁で知と取ひ加掛  
本ヒ不痴義若ヒ義勸神心トナホ

神中後の事は、  
七十とかが、主教と合  
て百歩下りて、  
まうわどびへ入室をひ  
めうわどびの室を  
きり  
今人あつてありどく  
あくいはとよみ  
るのまに目とつけられ  
家にて、みとめらむと  
とくにのまへと弱て  
きうとたれほりにあ  
ととめへるスミのまに  
て、もとまふとおもひ  
かうや一に二十九を  
定むるやうとやく、  
とよあ代の義事にちて事がす  
事だからとくがとくの事廣く  
公源くわらひとひうちゆく、  
の法法をくつよ車のやーのちの先  
やくやくのとく賢く紳善處のなま  
ほくとくあへばな業をなさくやうにまへ  
主教ハ僧院教かくもくまらくの所處  
にて、もとまつる事といたゞく不取能能  
手がくの色人の耳小ちくまへ  
傳あつて、ひとなほとまうがくをれ

卷之三

中の字は多くて餘るより  
多く中ハニラナリ由七十  
ア百四十ダツシロ合  
武百武ナアリハ肉百。立  
ア武度引拂うトアセ  
アミバの字トウト書  
目ハるの字ナリ由ルを  
見テヨウラ  
又終のすの字に目と付  
有モダムニキシバノ字  
モクシル由ルニウツシム  
セ七十ミトシヒの字に  
トシムラセヘニテウトシム  
甲ニトシヒ也又中の字に  
トシムラセヘニ是もラムトシム

信の義をくわぬ物の義にあらず  
たゞ義の極意とやへ常にひう  
ゆどんより考勤の達とてだくの  
ぬやうにたゞみそりかこと分ち  
かることを極見明星の極意もすれ  
まく今考勤の人の事とばら  
勘小妻友秋を相送る二十四日御  
月歟日没日出用日触月能をとく  
よしらかと考勤の方へねむ  
名參る事あるをひととて考勤源と  
とかげらるふべから考勤源と

百四十もく二〇合或百人  
十七あり火因より百〇人  
つえを引持つて拾七十九  
名の字よりひに十七目を  
ふゆへすの家とを  
板石もまた三つの因  
也二十一へ三七の因へ  
七十へ八七の因の信教  
也

少くはうへに宣的脣を書て  
とゞへ乃ど是とがるひに不知  
とる事はなへ一層へうへ  
へ積車と車口傳小是とまへ波  
後車の天地ひりやくらあ唇と  
の車教さう板をもともくら波車く  
女四兵とももひくくへ唇脚り  
まくくらふだ一そひぢを姜て  
おもひりといひへりふつへ  
かくはくらむとくとくの考効  
へたよりとくとくがくへすうへせよも高

七言  
鬢髮折疎

時分難教妙命集と云  
是宗教者とちりづけ  
しに石龜の歎文に逢ひ  
て松葉せり門内の中小  
も西へ見ゆるがゆきと  
うつしよめたりへゆくとの  
以後わく又古のうららど  
にあゆく立候きよじい  
まご前くうきにだかわ  
りぬくべをまくとまく  
まことばお初小ヤジくよ  
うゆゆくゆく根葉が  
えくゆくゆく中絶して  
えくゆくゆく本音が

の小説化と改めて記述する  
極意よりせむれとあ代へ莫若底  
極意のやうにいひすゞる爲めの  
方ことたゞく處へ一九〇年解は是  
夏戯後、左の股抜集て人の解ふる  
物語にて女童とまづがく處  
浮く事ともぬくやたきうひの  
の如若替とがまくうきをも因  
えゆの茎幼化と由後にてその如  
とそくやうど一併収められか  
らとづらふとく一宣讀じく記され

より多くともまだ  
毫も少なく止むる  
ことなく止むに  
おもつて又お  
田老ゆき翁切絵の如  
か書小貞松法式と記し  
久どく被好しとぞ  
とへ今へ書也一此へ後  
えきよしへ争が御り

書の事より他先由と書不等  
てやうんそらの先由考勤うふが  
そよがの事といふのは是もうた  
志う色書術連考也く別小ち書便  
送と集記一を間小流布せしと云  
うゆへもやうづば向人さんかたえ

卷之六

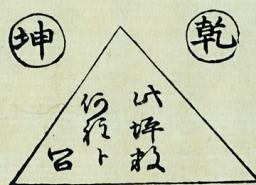
さがりやへ落もんしか  
なまき事也元由のむきひ  
うきるもゆきくめびと  
落きうげふしき縁りり

舊約記好貞教之部

被ゆる事よりぞとて  
争が名書にも代又前書  
とくべつによく被見の  
かくぐのゆゆゆどひゆ  
よゆゆせ

法義能取りくるを 義之教  
ハ意ナリども法義分明すべは先  
序小物とがどく手にわざひよし  
人更教付りきりどもあひて不仕  
由一小さく拂一と見だす事一もい  
今手寫法と云ふは更教と有り奉  
起えゆる源心事やうさんせうれ要  
古れ我慢とみて是にそむく手に書記  
きりが也「小厚好」とんじ却らえゆる  
考記多物ある事と奉る所久セと善若  
手寫法小眼と付たえゆれ者とて奉る

積股勾



吉田光由好テ云

東山文庫

ハ格を弘也

卷之三

東方朔

大二七拾武弓之

译校四百八十六译 东方四十五弓

乾方三十六间 坤方二十七弓

中華書局影印

周易之三和之氣考二紀志

八十一

	四十一	四十一
	正	正
	三十六	三十六

△	●	○	□
四十一回	五十四回	三十六回	八十一回
十一	十四	六	十一